みなと物語

港晴小学校

港晴小学校は、昭和36（1961）年に今の八幡屋小学校から分かれて誕生し、今年50周年を迎えます。「港晴」の名前は、地域に港湾関係の仕事に従事されている方が多く、港が晴れたら仕事にも恵まれ町も元気になるという願いを込めてつけられました。校章にも、古来から航路標識であり、大阪市の市章でもある「みおつくし」が取り入れられています。
学校創設時の町名は、八幡屋浮島町でしたが、昭和43（1968）年9月の町名変更により、校区の町名はすべて学校と同じ「港晴」となりました。まさに地域とともに歩んできた学校です。

杣友（そまとも） 学さん

今回は、息子さんとお孫さんが港晴小学校を卒業された港晴地区社会福祉協議会会長杣友（そまとも）学さん、ＰＴＡ役員をされていた杣友登紀子さんにお話をうかがいました。

「小学校ができた当初は、野原の中に鉄筋校舎が1棟あるだけでまだ設備が整っていませんでした。そこで、PTAが集まって何度も準備委員会を開き、校庭の地ならしをしたり、プール建設のため夜に寄付集めに奔走したりの苦労がありました。その苦労のおかげで、昭和39（1964）年には、現在の校舎となりました。昭和37（1962）年の第1回目の卒業式は、まだ講堂ができていなかったため、寒風吹きすさぶ中、校舎の屋上にテントを張って開催されましたことを懐かしく思い出されます」

建設中の1号館（昭和35〔1960〕年）
「「港晴」10周年記念誌」より

現在は8学級219名が在籍していますが、1000人を超える児童がいた昭和40年代中頃（1970年頃）は、観客席がこみ合わないよう、運動会は平日に行われました。当時の在校生は、休み時間になるといつも「港晴の森」（なかよしの森）で遊び、家庭科の時間に作った「ゆで卵」をその森で食べたときの味は、格別だったと思い出を語る人もいるなど、小学校は卒業生の心のふるさととなっています。

なかよしの森
「「港晴」創立40周年記念誌」より